



理事長就任のご挨拶

学校法人岩手医科大学 理事長 祖父江 憲 治

この度、小川彰前理事長の後を受け、岩手医科大学理事長を拝命致しました。本学の大激動期に際し、事態の重大性と責任の重さに改めて身が圧せられる思いです。これ迄の副学長時代（五年）から学長二期（八年）を終え、次世代へのバトンタッチと考えておりました矢先、事態はこの私的願望を許容する余裕も無く、現実が先行して押し迫り、理事長拝命を決意するに至りました。

小川前理事長と私の二人三脚で進めてまいりました人造りの一環が、本学を牽引する指導者造りでした。現在では、小笠原邦昭学長をはじめ国内外で大活躍する教授が数人出てまいりましたし、そのレベルへ頭出している教授と教員は相当数にのぼります。今後は彼らを中心にして、次なる後進の指導をして頂き、本学が各方面で活躍するまさに全国区の大学へと進化すべく、環境整備を続けてまいります。

本学が旧内丸附属病院から矢巾キャンパスの新病院へ移転し、矢巾新病院と内丸メディカルセンターの二病院体制で運営を開始し、早や五年が経過し六年目に入らんとしています。矢巾新病院は岩手県のみならず、北東北の医療中核拠点として、その役割を果たしております。いっぽう、内丸メディカルセンターは医師をはじめとした医療スタッフ不足のため、スタッフの努

力にもかかわらず地域医療拠点として、未だ十分な役割を果たすに至っておりません。

矢巾新病院建設費の高騰で当初予定していた借入金が増大し、この返済開始の矢先（移転直後）に新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起りました。その後、コロナ禍での医療収入減、コロナ以外の矢巾・内丸両病院の当初想定を超える収支アンバランス、歯学部・薬学部の大巾な入学者数減少（定員割れ）に伴う学納金収入減など複合的要因が重なり、財政危機に陥りつつあります。現在、財務改善策、矢巾・内丸両病院の効率的な機能整備と運営、定員割れを来たしている学部の入学者増対策、医・歯・薬・看護四学部の教育改革などについて、短期と中長期の対策案を早々に取りまとめ、圭陵会の先生方に提示し御指導を仰ぎ、実行に移す所存です。

本学の長い歴史に刻まれた土壌の上でこれに満足することなく、新たな岩手医科大学を造っていくという強い覚悟と自省を込め、本学運営を進めてまいります。同時にこれを機会に、本学の構成員一人一人の意識改革を図っていくべき時だとも考えています。圭陵会の諸先生方におかれましては、今後ともに御理解と御指導を賜りますようお願い申し上げます。



学長就任のご挨拶

小笠原 邦 昭

今般、第十二代岩手医科大学学長を拝命することとなりました。本学は今年創立127年目になります。学是である「医療人たる前に、誠の人間たれ」を実践すべく邁進する所存です。

まず、圭陵会の皆様に自己紹介させていただきます。私は青森県旧十和田町（現在の十和田市）で町役場勤めの父、洋裁を生業とする母から生を受けました。地元の小中学校を経て、八戸高校に越境入学。その後弘前大学医学部を卒業しました。すなわち、24歳までは青森県を出たことがありませんでした。卒業後、脳神経外科医を志し、東北大学脳神経外科の鈴木二郎先生の門をたたきました。医師免許をもらい、最初に勤務した旧国立仙台病院（現在の仙台医療センター）で私の最初のオーベンであったのが小川彰先生であり、それから40年間師事しました。14年間東北大学脳神経外科にいましたが、その間30回勤務地が変わり、長女は幼稚園4回、小学校を2回転校しています。38歳の時に岩手医科大学に赴任し、26年たちました。盛岡は人生の中で最も長く住んだこととなります。

岩手医科大学は三田俊次郎先生が明治30年に建学されて以来、多くの先人のご努力により歴史を築いてまいりました。毎年毎日が激動との直面であり、安寧な時期・瞬間はなかったと推察します。皆様が感じていますように、現在も激動の中にいます。しかし、先人も同じように感じて、大学を発展させてきたのでは

ないでしょうか。学長とは、この激動の中でよりよい方向あるいは方法を模索して、導く仕事であると認識しています。

本学は大学でありますので、研究は必須であります。私の主観では、現在の岩手医科大学の研究の発信元は医歯薬総合研究所の各部門であることが多く、当大学の研究を発展させるためには、ここを発展させることが、最も合理的ではないかと考えます。本来医歯薬総合研究所は各学部と乗り入れし、共同して研究成果をあげるために作られた部門であります。しかし、共同研究を行っている部署はわずかであり、もったいなさを感じます。看護学部も含めた総合研究所として、さらに各学部、各部署との共同研究を行い、科研費も含む公的競争研究費を獲得していただきたいと思います。

附属病院が矢巾、メディカルセンターが内丸に分かれて5年が経とうとしています。この間、移転前に想定していなかったあるいは想定していても実情は異なっていたことが多くありました。病院長として、現場を含めて着実に解決をしていったつもりですが、この道には終わりはないと感じています。附属病院およびメディカルセンターの収支はどうなっているのかをよく聞かれます。結論からいうと、赤字です。その理由は、2つの施設の働きが悪いわけではありません。むしろ職員の努力で両施設とも稼働額は上限にあると思います。問題は、コストです。2つの施設が年間に

支払うコストは、移転前に予想していたものより大きくなっています。今後は、今の稼働を維持しつつ、如何にコストを下げるかを検討しなければなりません。幸い、附属病院職員に病院経営についての意見を募集したところ、多くのアイデアをいただきました。これらのアイデアと世の中の流れをにらみつつ、経営改善をしていきたいと思っています。さらに、皆様お気づきのように、附属病院およびメディカルセンターの中長期的な展望も決めなければなりません。特に、メディカルセンターの将来は盛岡市あるいは岩手県の内丸地区再開発と連動しています。行政の動きを見つあるいは協力しながらメディカルセンターの将来像を描きたいと思います。

医療系大学の教育とは何でしょうか？当大学としては、まず「医療人たる前に、誠の人間たれ」の意味を考え、実践することが第一です。一方で、私自身は「研究と臨床のやり方を教育する」ことを行ってきました。すなわち、「確かな研究基盤とすぐれた臨床を行う場がなければ、教育はできない」という信念があります。もちろん教育の対象は学部学生のみならず大学院生および若手医療者も含みます。しかし、現実的には医療系大学は国家試験の合格率で世間からは評価されます。この点を十分ご理解し、日夜学生指導に注力されている教員・職員の皆様には頭が下がります。一方で、現在の少子高齢化と高い大学進学率のなかで、「国家試験の合格度を格段に上げる」魔法はありません。「われわれが入学させた学生を留年させず、卒業させる」ことを着実に進めることしか方法はないと考えます。働き方改革のなかで、この負担を教員・職員の皆様に強いることは大変心苦しいのですが、頑張っていた

くしかないと思っています。

私自身はこの6年間病院長を行う上で、大事にしてきたことがあります。それは「現場主義と情報開示」です。「なるべく現場から情報を集め、何をすれば現場がよくなるのか？」を考え、「問題点があれば、解決方法とともに開示する」ことです。この方針は学長となって今後も継続するつもりです。加えて、政治・行政の流れを理解することです。この流れにそのまま乗るつもりはありませんが、世の中の流れを見誤ると、危機に陥ることは明白です。この辺は十分注視していきたいと思います。

最後に、私は、人と話すことが好きで医者になったようなもので、話し合いは大歓迎です。圭陵会の皆様には是非意見を言いに来ていただきたいと思います。我々が気づかない問題をご教示いただきたいと存じます。皆様と一緒にこの大学をよくすることだけを考え、努力してきたいと思っています。ご支援、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。